

鶏のロイコチトゾーン症の研究史における暗中模索からの 脱出記録（15）

誌名	畜産の研究 = Animal-husbandry
ISSN	00093874
著者名	秋葉,和温
発行元	養賢堂
巻/号	67巻9号
掲載ページ	p. 947-952
発行年月	2013年9月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



鶏のロイコチトゾーン症の研究史における

暗中模索からの脱出記録(15)

秋葉和温*

私は昭和48年4月から岐阜県関市に作られた鶏病支場の寄生虫研究室室長となり、赴任した。その際、飼育装置を本場からトラック輸送した。また支場で使用する水は市の水道水となるため、ニワトリヌカカの飼育には不適當であったので、小平の厩舎の入り口に設置されていた大きなコンクリート製の水槽を貰って運んだ。この水槽を支場の寄生虫研究室の南の窓の下に置き、水道水を入れ、塩素を蒸発させて、その水をポンプで循環して飼育装置に導入しようとしたのである。ニワトリヌカカの飼育装置一式は、そのまま木材で枠組みを作って固定し、水も滴下するようにしてトラックに積み込み、私が助手席に乗り、飼育装置の様子を時々、見ながら東名高速道路を西下して支場に運んだものである。支場に到着して、それぞれをセットし、赴任するまでの作業を先発の職員に頼んで、小平に帰った。このようにして鶏病支場でのニワトリヌカカの飼育とそれを使用して、鶏ロイコチトゾーン症の研究を継続したのである。

しかし、夏は水槽の水は熱湯のようになった。氷を入れて冷やしたが駄目であった。そこで夏は室内に小型の水槽を設置して循環させたが、これでも夏は氷を入れる必要があった。冬は飼育装置全体をビニールの布で覆い、育雛用の電球を取り付けて暖房した。ニワトリヌカカの飼育には摂氏25度前後の環境が適している。小型の環境制御装置の購入要求を毎年出していたが、私のいた間は予算の配分はなく、適した環境での飼育は実現できなかった「鶏病支場21年の歩み」(平成5年9月発行)。

この当時、森井技官は杏林大学医学部寄生虫学教室の助教授となっておられた。ここでは環境制御の研究室があり、その中でニワトリヌカカを飼育しておられ、多数のニワトリヌカカを生産されていた。鶏病支場での生産が危うくなった時、何回かニワトリヌカカ成虫の分与を受けたものである。森井さんが

おられたから、私達のロイコチトゾーンの原虫株の継代もでき、それを使用しての研究も継続できたようなものである。

ニワトリヌカカの生産のこともあり、分離当時の原虫株の性状を維持しておくためにも、株の保存は重要であった。このため、凍害防止物質、グリセリン、ジメチルスルオキサイドや牛精液凍結用卵黄緩衝液=ネオセミナンL(商品名、武田薬品製品)などを用いて検討した結果、スポロゾイト保有ニワトリヌカカをネオセミナンLの第1次希釈液で乳剤とし、次いで等量の第2次希釈液(グリセリンを含む)を加え、冷蔵庫に4時間前後、静置し、その後、1ml用のプラスチックストローに0.5ml前後宛て充填、閉封し、液体窒素上で5~10分予備凍結した後、液体窒素中に漬けて凍結保存する。感染鶏を必要とする場合は凍結ストローを40℃の温水を用いて、40秒前後で融解した後、冷水中に置き、できるだけ速やかにストローの半量宛てを鶏の静脈内に接種する。接種鶏のパラサイテミア(末梢血液への原虫出現)は時に1日遅れる場合もある。この融解したものを、多数の鶏に接種するため、希釈して接種すると感染はまちまちとなる場合が多い。私は保存したストローからは2羽のみに接種して継代用に使用していた。4年間は保存されていた(第86回日本獣医学会講演要旨158ページ)。

この保存方法は農林省畜産試験場(千葉)の長瀬弘技官に教えていただいたものである。その後、10年後も保存されていた。その一部は日本ファーマシ(株)の増淵さんのところで保存されている。

7. ロイコチトゾーン・カウレリーの生活環について

アヒルや七面鳥のロイコチトゾーンはブユ(Black fly)によって媒介されることが明らかにされているが、鶏のロイコチトゾーンはブユではなくニワトリヌカカによって媒介されることが判明した。

* 元農林水産省家畜衛生試験場 (Kazuo Akiba)

今まで、ヒナ、中びな、成鶏の自然感染例の観察やヒナの出血死亡例では体内いたところの臓器から多数のシズントを検出してシズゴニーの存在を確認するとともに、自然感染鶏や人工感染鶏の経時的な観察から、シズゴニーに続いてガメトゴニーの存在すること、ガメトサイトはガメトゴニーの最終段階であって、その前の段階はシズゴニーであることなどが明らかとなった。

そして感染鶏を吸血させたニワトリヌカカをスライドグラスにすり潰しながら塗抹してギムザ染色した材料から群馬県宝泉村の久保田さんの家で、最初にオーキネートが発見され、その後、スポロゾイトも発見されるなどして、スポロゴニーの各期の形態も観察することができた。

このように、ニワトリヌカカが中間宿主であることが実験的に証明され、人工感染鶏についての観察とあわせて、ロイコチトゾーン・カウレリーの発育過程は一つの発育環、生活環として示すことができるようになった。

すなわち、この原虫は、鶏体内でのシズゴニー (schizogony: 増員増殖, 無性生殖) とガメトゴニー (gametogony, gametogenesis: 有性生殖母体形成), そして媒介者 (vector) であるニワトリヌカカ体内でのスポロゴニー (sporogony: 孢子小体形成) の三つの発育過程が見られることが明らかとなった。

そこで、シズゴニーにおけるシズントの経時的発育過程の形態について観察する目的で、前述したように(6. その後に改良された点の中に記載したように)、媒介者が判明した段階で、感染ヌカカ乳剤を20~30羽のヒナの静脈内に接種し、毎日、2羽宛、殺処分して、各臓器を採取し、切片標本を作り、ヘマトキシリン・エオジン染色をして、顕微鏡検査でシズントの検出を試みたのである。ところが、この試験の感染対照とした4羽の感染もまちまちとなっていたし、経時的に採取していた臓器のほとんどの臓器で、シズントを検出することができなかったのである。

また、同時期に同様の羽数の人工感染鶏を使用して薬剤の効力試験も実施していたが、この試験でも感染対照鶏の感染がまちまちとなっていて、効果判定が不能となっていたのである。

これらの結果から、別記したように、感染ヌカカの乳剤を生理的食塩水でするのではなく、私が清水

室長の研究室にいた時、手伝っていた組織培養に使用していた液の使用を思い付いて、その試験を実施し報告したが、この液での乳剤を1, 2羽に接種してシズントの検索を行った結果、7日目のものに第1代のシズントが見つかったのである。その成績については次の報告に記載している。

Akiba, K., Inui, S., Ishitani, R. : Morphology and distribution of intracellular schizonts in chickens experimentally infected with *Akiba caulleryi*. Natl. Inst. Anim. Hlthy Q. 11, 109-121 (1971).

1) シズゴニー

この原虫に感染したニワトリヌカカが鶏を吸血する時、その唾液とともに鶏体内に注入されたスポロゾイト (sporozoite) は肝、脾、肺、腎などに寄生して第1代シズント (schizont) を形成する。感染後6日前後で第1代メロゾイト (merozoite) が放出され、それらは血液を介して前身に分布する血管内皮細胞に侵入して第2代シズントとして発育する。この侵入細胞の核は巨大化する。9日頃から宿主細胞の破壊により放出されたシズントは、その寄生部位によって血流で流され、単独のシズントとして、または集団として発育を続け壁を形成する。13~14日で多数の第2代メロゾイトを内蔵した成熟シズントとなり、14日で一部のもものが、15日で多数のもものがメロゾイトを放出するようになる。この第2代シズントは、出血死亡した鶏の体内至るところの臓器の組織切片標本から検出される。

2) ガメトゴニー

感染後14日に第2代シズントから多数の第2代メロゾイトが放出され、それらは赤血球系細胞内で発育し、18~19日以降、宿主細胞から遊離して、マクロガメトサイト (macrogametocyte: 雌性性殖母体) とミクロガメトサイト (microgametocyte: 雄性性殖母体) になる。ガメトサイトが形成されるまでの形態変化はI期からV期に分けて観察している。

I期はシズントから放出されたメロゾイトそのものである。II期は赤血球、多染性赤血球、赤芽球などに見られるもので、I期のものとあまり変わらないものや、リング状、顆粒状に近いものなどもある。III期は宿主細胞内で漸次大きくなっているが、まだ雌性、雄性の区別のつかない時期のもので、II期の原虫よりやや大きくなっている円形のものから、かなりの大きさになっているものまで見られ、中に円

形の核がある。宿主細胞は原虫 1 個の寄生でも 15 ミクロン前後と大きくなっており、数個のⅢ期の原虫が寄生したもので、さらに巨大な細胞となっている。Ⅳ期は宿主細胞内で雌性、雄性の区別が認められる時期のもので、宿主細胞は 21 ミクロン大にも達する。Ⅴ期は宿主細胞の全く見られなくなっている 15 ミクロン前後の円形ないし卵円形の 2 種類のガメトサイトの見られる時期のものである。

感染鶏の末梢血液検査では、1 期の原虫の検出に続いてⅡ期の原虫が一時急速に増加し、その後消失する。この時期は数日である。Ⅱ期の原虫の数が減ると、それと反対に多数のⅤ期のガメトサイトが出現し、これも数日後には消失してガメトゴニーを終了する。ガメトゴニーの期間は 8~12 日で、スポロゾイトを鶏に接種した場合、シソゴニーを経てガメトゴニーを完了するまでの期間は 23 日前後である。このような日数の関係を示すものを定型的パラシテミアと呼んでいる。末梢血液中のⅡ期の原虫数は接種スポロゾイト数に比例するが、ガメトサイト数はまちまちである。また、1 回に 5~500 個のスポロゾイトを 1~2 日の間隔で 3~5 回繰り返し接種しても、潜伏期やパラシテミアの程度、期間は 1 回のみ接種した場合とかわりなく、それらはすべて初回の接種により支配される。

しかし、1 個のスポロゾイトが静脈内に接種されたものや、数個以上が静脈内以外の部位に接種されたものの一部、または、ある程度、薬剤の作用を受けたものなどでは、Ⅱ期、Ⅴ期の原虫の出現日が遅れたり、原虫数がきわめて少数で末梢血液塗抹の全視野を鏡検しても数個しか検出されないものなどに遭遇する。このようなものを非定型的パラシテミアとして処理している。

また、末梢血液塗抹標本で少数しか観察されないⅢ期及びⅣ期の原虫は、臓器内の静脈性毛細血管内、管腔の広い静脈性血管や、骨髄の赤血球造血部位などに多数見られる。

3) スポロゴニー

この原虫はブユ、ワクモ、アカイエカでは媒介されない。末梢血液中のガメトサイトは、ニワトリヌカカに吸血されると、ヌカカの中腸内で、それぞれがガメト (gamete) となる。雄性ガメトは鞭毛を形成する。そして接合してチゴート (zygote) になり、さらにオーキネート (ookinete) に成長し、中腸壁で

オーシスト (oocyst) を形成する。オーシストが成熟すると、多数のスポロゾイトが遊出し、ヌカカの唾液腺に集まってスポロゴニーを完了する。

鶏血液中のガメトサイトの消長と、それを吸血したヌカカ体内でのスポロゾイト形成数との関係は森井の報告があり、ガメトサイト出現初日に吸血したヌカカに最も多くのスポロゾイトが形成され (1 匹のヌカカで約 2,000~3,000 個)、その偏差も最小である。しかし、その後は急激に減少し、ガメトサイトの消失日に吸血したヌカカでは、スポロゾイトは全く形成されない。

ウシヌカカからのウシのアカパネウイルス、オルビウイルスの分離

私は昭和 58 年 10 月、鹿児島市にある家畜衛生試験場九州支場に支場長として赴任した。

私は前述したように、昭和 25 年 (1950 年) 4 月 1 日付けで家畜衛生試験場に採用され、最初は病毒課に配属された。この当時は日本脳炎の流行や、1949 年~1951 年にわたって、いわゆる牛の流行性感冒 (一般には“牛の流感”と呼ばれていた) の大きな流行があった時代で、日本脳炎の研究を手伝ったり、流感で感染死亡した病牛の解剖を手伝ったり、それからのウイルス分離の試みなどをみたりしていた。アルボウイルス (節足動物媒介ウイルス) という言葉を覚えたのも、この頃であった。そして、このアルボウイルス感染症に対する関心は、その後も持ち続けていた。

その後、大森常良、稲葉右二技官らにより牛の流行性感冒は流行熱症候群として、流行熱、イバラキ病、その他に分別されるとともに、牛の数々のウイルス病についての輝かしい膨大な業績が蓄積されていた。

牛のアルボウイルス感染症については、オーストラリアで節足動物の調査と平行して、これらから各種ウイルスの分離が盛んに行われていた。この中にはオーストラリアに分布しているヌカカからの多くのウイルスの分離が報告されていた。私はこのヌカカから各種のウイルスが分離されているということについて、特別の関心を持つようになっていた。

日本では、外部寄生虫担当の北岡室長がヌカカと家畜疾病についての解説の中で、外国でのヌカカからのウイルスの分離状況について紹介されていたし、北岡室長の指導のもとに畜産局衛生課が中心と

なって、数カ所の県で蚊とヌカカの調査とウイルスの分離が試みられたが、福岡県でホシヌカカから一種のウイルスが分離され、稲葉室長の研究室の明石らによりラブドウイルスであることが報告されたが、これが唯一のものであった。私は当時、鶏病支場において、はがゆい思いをしていたのである。

外国ではブンヤウイルスのシンプ・グループのウイルスのうち、アカパネウイルスを含めて5種のウイルスが、オーストラリアのヌカカから分離されているし、ナイジェリアのヌカカの種としたものから、アカパネウイルス以外の、このグループのウイルスが分離されている。またオルビウイルスのグループのアフリカ馬疫ウイルスが南アフリカやスペインなどのヌカカから、ブルータングのグループのブルータングウイルスが南アフリカ、北アメリカ、ナイジェリア、ケニヤ、オーストラリア、キプロス、イスラエルなどのヌカカから、イバラキ・ウイルスはオーストラリアのヌカカから、パリヤングループのウイルスはオーストラリア、ナイジェリアなどのヌカカから、ラブドウイルスグループの流行熱ウイルスはケニヤやオーストラリアのヌカカから、その他のラブドウイルスはオーストラリアと明石らのものなど、それぞれの国に分布しているヌカカの種から、多くのウイルスが分離されているのである。

佐沢場長から九州支場長を拝命した時、鶏のロイコチトゾーン症の研究は中断して、牛舎で採取されるヌカカの種類とそれらの季節消長の調査とウイルス担当に松本稔先生の指導を受け、大森部長、稲葉室長のもとで研究し、アカパネ病の研究で業績を挙げておられた黒木室長がおられるので、ヌカカからのウイルス分離を黒木室長にお願いしようと決意したのである。

そして、赴任した翌日から仕事ができるようにと、鶏病支場で、ロイコチトゾーン症の研究に使用していたライトトラップを1台、捕虫網4部、ナイロン製の蚊帳1張、ヌカカの吸血管兼飼育管3組、昆虫用先細ピンセットなどを持参したのである。

また、この支場の特種性について論文を書き、本場、各支場に配布した(昭和59年8月15日付け)。その中で、私は九州支場の歴史的背景、畜産業からの背景、生物地理学的背景などの特徴を述べ、特に生物地理学的背景の中では、次のように述べた。

「沖縄県の日本本土復帰により、九州支場の管内には亜熱帯に属する地帯が存在することとなった。九州本島は北緯31度から34度の間に位置しているが、対馬と八重山諸島を加えると、北緯24度近くから34.5度の間に存在する地域が九州支場の管内となった。また、鹿児島県の南部から沖縄県にかけては生物学上特徴があり、九州本土と屋久島、種子島の間には三宅線が引かれており、奄美大島の北には渡瀬線が、さらに南に下って沖縄諸島と八重山諸島の間には蜂須賀線が引かれており、全北区と旧熱帯区が、この線で分けられている。一般に渡瀬線から南が亜熱帯に属するとされている。

したがって、九州支場の管内には旧熱帯区に属する八重山諸島、亜熱帯に属する島々、それに隣接する九州南部地区、そして冬は気温が零度以下に下がり、雪も降る地域も存在するように、きわめて変化に富んだ地域をかかえていることになる。

この亜熱帯の島々は節足動物の常在地である。それらの地域を発生源とするのではなかろうかと疑われている疾病の流行は、最初は九州で発生し、北上する傾向にある。このような地域での医学的、獣医学的諸問題が九州地区では追求されなければならないと考えている。これらの問題は、医学関係では九州に存在する大学の医学部に熱帯医学研究施設を併置して、すでに長年にわたって調査、研究されている。

家畜衛生試験場には海外病部があるが、これはわが国に侵入する恐れのある悪性伝染病の調査、研究が中心である。国内にあって、医学部における熱帯医学研究施設とその研究テーマとほぼ同様の性格、機能を併せ持つものとして、九州支場の存在が意義づけられなければならないと考えている。」

そして九州支場の特殊性を①支場管内に亜熱帯、暖帯、温帯が存在する。②家畜の頭羽数が日本最大である。③本場と依然として遠距離にあるなどとし、我が国の家畜防衛の最前線基地として、より充実すべきであると要望した。そして節足動物媒介ウイルス感染症の研究として最適であり、そのメッカとなりうる、またメッカとしなければならないと強調した。

そして重要研究項目の一つにウシの節足動物媒介ウイルス感染症の研究を取り上げ、ニワトリヌカカでの上述の数々の知見を参考としてまず、ライトトラップを牛舎に設置して、ウシを吸血にくるヌカカに

ついて私が調査、分類をし、ウイルス担当の黒木室長がウシヌカカ、その他からのウイルス分離を試みた。その結果、ウシヌカカからアカバネウイルスやオルビウイルスが分離されたのである。

秋葉和温・黒木洋・平享・国場保・北岡茂男, 1985, 鹿児島県と沖縄県の二、三の地域の牛舎で採集されたヌカカの種類。第99回日本獣医学会講演要旨 117 ページ。

黒木洋・秋葉和温・久保正法・後藤義之, 1986, ウシヌカカ (*Culicoides oxystoma*) からのアカバネウイルスの分離。日本獣医師会雑誌, 39, 166~170。

黒木洋・秋葉和温・久保正法・後藤義之・三浦康男・寺尾恭子, 1986, ウシヌカカ (*Culicoides oxystoma*) からのオルビウイルスの分離, 日本獣医師会雑誌, 39, 698~701。

Kurogi, H., Akiba, K., Inaba, Y., and Matumoto, K. 1987. Isolation of Akabane virus from the biting midge *Culicoides oxystoma* in Japan. *Veterinary Microbiology*, 15:243-248.

鶏病支場は鶏のロイコチトゾーン症の流行地に存在していた。毎日、出勤し仕事をやる支場の研究室が、そのまま野外試験地ともなりえたからである。色々の相談を持ち掛けられた時、すぐ支場の鶏舎で試してみることができた。私にとっては、大変、恵まれた所であった。

九州支場もアルボウイルスの流行地の中に存在する。おとり(囿)の牛を支場の畜舎で飼育することで、ウイルス感染の状況も手に取るように観察することができるし、ライトトラップを設置して、翌日、出勤して、畜舎に行き、捕虫網を回収すれば、ヌカカも調べることができた。こんな恵まれた所はない。アルボウイルス研究のメッカとなりうる支場ではなかろうかと強調したのです。そして、この方面のベテランの黒木室長がおられたことで、アカバネウイルスやオルビウイルスを分離することができたのである。

当時、松本稔先生から次のような年賀状を貰った。「御年賀状ありがとうございます。九州支場長をやっておられる由。今後ともよろしくお願い致します。近頃は筑波の本場にも御無沙汰で、家畜衛試の様子もうとくなくなっていました。ヌカカからアカバネウイルスを分離された由、うれしく思います。アカバネウイルスのベクターの問題はずっと放置

されたままだったので、本当にうれしく思います。今後の成果を期待しています。昭和60年1月4日」

そして私(秋葉)は昭和60年1月21日で60歳を迎え、3月31日付けで60歳停年で退職し、支場を去ることになったのである。黒木室長もこの年の4月1日付けで、本場に転勤となり、私の次の甲野雄二支場長らに、この課題は引き継がれ中山ウイルス感染症としての研究が展開されたのである。

このように、鶏のロイコチトゾーンの媒介者ニワトリヌカカに関する知見の蓄積から、我が国で初めて、ウシヌカカからウシの節足動物媒介ウイルス(アルボウイルス)感染症のアカバネウイルスやオルビウイルスを分離することができ、この方面の研究の進展に寄与することができたのである。

第4章 鶏のロイコチトゾーン症の防圧対策は、いかにして検討されてきたか

私は兵庫県清滝村での発生時に川島秀雄先生とともに当時、鶏コクシジウム症の治療薬としてよく使用されていたサルファメラジン(ロメジンソーダ、商品名)の飲水投与を試みたこと、しかし、効果判定は困難であったことは前述した。

その後、この原虫病がロイコチトゾーン・カウレリーに起因した疾病であることが判明した段階で、その予防治療薬に関する文献を調べたが、そのような文献は見当らなかつた。

そこでアヒルや七面鳥のロイコチトゾーンについての文献を調べた。オロック(O' Roke, 1932, 1934)はアヒルのロイコチトゾーンに対してキニーネとプラスモヒンを、ファリス(Fallis, 1948)はアテブリン、サルファメラジン、パルドリンなどを使用した。いずれも効果は認めていない。また七面鳥のロイコチトゾーンに対してはバイーラー(Bierer, 1950)およびサヴェジ(Savageら, 1959)などはサルファキノキサリンを使用してよかつたとしているが、その量、方法、原虫に対する態度などについては記載していない。

このように、きわめて少数の薬剤が試験されたに過ぎず、しかも、いずれの薬剤も予防効果、治療効果も認められておらず、したがって予防治療薬として認められ、使用されている薬剤はまだ全く出現していなかつたのである。それゆえ、我が国に毎年流行している本症を防ぐには、我が国で効果のある薬剤を

捜し出さなければならぬといった状況にあったわけである。

幸い、前述したように、1958年熊谷家畜保健衛生所管内の大里村や1959年からの群馬県養鶏飼料

研究会の皆さん、さらには山梨県住吉種畜場、後に畜産試験場の皆さんの協力が得られたことで、まだ媒介者(ベクター)の未決定の段階から、私達の有効薬剤捜しが始まったのである。

【農業畜産情報】

稲 WCS のセシウム低減 刈り高 15 センチ以上に 畜草研

農研機構・畜産草地研究所は7月25日、稲発酵粗飼料(ホールクロップサイレージ=WCS)の放射性セシウム濃度を低減するには、収穫時の刈り取り高さを土壌表面から15センチ以上とすることが有効だと発表した。セシウムが比較的蓄積されやすい茎葉部分の割合を減らすと同時に、セシウムを含んだ土壌が付着しやすい地際の部分を残すことで濃度を抑える。

稲 WCS は茎葉と子実を同時に収穫、発酵貯蔵し、牛用の飼料にする。畜草研は福島県農業総合センター、栃木県畜産酪農研究センターと共同で試験に取り組んだ。

刈り取り高さを8, 16, 24センチに設定して収穫した稲 WCS のセシウム濃度と乾物収量を調べた。セシウム濃度は8センチで収穫した場合よりも、16センチで24%, 24センチで36%低減した。乾物収量は8センチと比べて16センチで5%, 24センチで11%の減少にとどまった。

土壌の付着、混入を抑えるには(1)倒伏を防ぐ(2)収穫時に水田表面が乾燥するように水管理をする(3)収穫しロールにしたらブルーシートの上に乗せる—といった対策も大切だ。

国のモニタリング調査で、12年産稲 WCS で暫定許容値(1キロ当たり100ベクレル)を超えたのは、東北、関東の6県460点のうち1点だけだった。刈り取り高さや土壌の混入に注意することで、汚染リスクをより小さくできる。

ハンター養成来月学校設立 岩手県の NPO 法人

岩手県花巻市の特定非営利活動法人(NPO法人)射撃場・施設管理総合支援機構は8月、全国に先駆けて狩猟者を育成する「ハンティングスクール」を立ち上げる。高齢化する狩猟人口の裾野を広げ、鳥獣害対策に貢献できる人材の育成を目指す。大日本猟友会とも連携し、全国のモデルケースにしたがい考えだ。

同法人は、銃を使う狩猟者の専門学校を開校するために、花巻猟友会を中心に、市、地域の土地改良区、地元企業などをつくる。花巻猟友会の藤沼弘文会長が理事長を務める他、理事には同市農林水産部の佐々木忍部長、商工観光部の高木伸部長、豊沢川土地改良区の平賀巖理事長らが名を連ねる。

受講者は全国から募集し、花巻市内のクレー射撃場を拠点に実習する。独自の教科書で銃刀法などの関連法や鳥獣害の実態を学ぶ他、銃の性能や具体的な捕獲手法、鳥獣の解体・加工処理まで実践を交えて手ほどきする。毎週金～日曜に泊まりがけで開講する予定で、1回の受講料は5万円前後。藤沼会長や有害鳥獣の専門家を招いた講義もある。

背景にあるのは、野生鳥獣による被害が社会問題化する中、捕獲に関心が集まるものの狩猟者を育成する場がなく、銃免許取得者が増えていないという問題だ。藤沼会長は「狩猟免許を取っても活用していない人、狩猟免許の取得に興味を持っている人に幅広く参加してもらい、現場の即戦力となる人材を育成する場としたい」と強調する。

授業内容の詳細は検討中だが、既に首都圏の30代の会社員ら全国から30人を超す応募があるという。

獣肉利用を軸にした地域活性化にも期待がかかる。同市の高木部長は「温泉街の活性化、農林業に深刻な影響をもたらす鳥獣被害の解決につなげたい」と前向きだ。連携する大日本猟友会も「実践に近い場所で銃の基本操作から有害鳥獣対策のノウハウまで学べる場所はこれまでなかった。こうした取り組みを支援し、軌道に乗れば全国に広げていきたい」とスクールの開校に可能性を見いだす。